

柱人社は、展覧会を一回開いた後、小倉淳が大正七年十二月に急死したこともあって解散してしまいが、それは装飾美術協会結成へつながる発展的解散であった。

⑧ 本多利実死去

『東京美術学校校友会月報』第十六卷第六号所載の追悼記事（屋代晃江著）によると、本校校友会には明治二十四、五年頃から同三十年頃まで弓術部があり、一時期中絶した後、同三十五年二月に復活した。本多利実はこのとき師範として招聘され大正六年十月十三日死去するまでの十六年間指導にあたった。本多家は竹林派の弓術をもって代々徳川幕府に仕え、利実は天保七年に生まれ、もとの名を橘之助または廣といい、生弓齋と号した。明治維新後大学史生、文部史生、内務少録、巢鴨村長等を経て明治二十六年芝西久保八幡神社祠官となつてからは弓術界のために尽くし、第一高等学校、日本体育会弓術部、本校、東京帝国大学、華族会館、学習院、千葉県師



本多利実

範学校、千葉医学専門学校、真宗大学、大日本弓術会等の弓術指南をつとめ、大正五年には弓道館を興して館長となり、その名声は一世を風靡した。晃江はその弟子で、彼は師の歿後、本校弓術部副指南および東京帝大弓術教導補助となった。

⑨ 香川勝広死去

もと教授香川勝広の死去を『東京美術学校校友会月報』第十五卷第七号は次のように伝えた。

○香川勝廣氏逝去 香川勝廣氏胃癌を患ひ一月十五日遂に逝く、〔大正六年〕翁は幕末の彫金大家野村勝守の門に出で、更に加納夏雄翁に就て學ぶ所あり、故海野勝珉翁と並び稱せられ、遂に帝室技藝員を命ぜらるゝに至る、明治三十一年本校教授に任ぜられしが翌三十二年六月退職す、日清戦役當時先帝御佩用の菊一文字の御劔の裝飾を命ぜられ前後四年に互り苦心製作せしもの、翁一代の傑作なりと傳へらる、其得意とする所は片切彫なりしと云ふ、享年六十五歳。

なお、『美術新報』第十六卷第四号（大正六年二月）にも訃報と略歴が掲載されている。

⑩ 沢村専太郎（号胡夷）のインド旅行

沢村専太郎は明治四十二年、京都帝国大学文学部哲学科（美学美術